

東京外濠・神田川の水辺空間に関する研究： 明治期の土手改変と周辺地域の変容過程を中心

高道, 昌志 / TAKAMICHI, Masashi

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

225

(発行年 / Year)

2016-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第379号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2016-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013073>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	高道 昌志
学位の種類	博士（工学）
学位記番号	第 601 号
学位授与の日付	2016 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 高村 雅彦 副査 教授 陣内 秀信 副査 教授 福井 恒明

東京外濠・神田川の水辺空間に関する研究
～明治期の土手改変と周辺地域の変容過程を中心に～

1. 論文内容の要旨

都市空間における水辺の意味を問うことは、都市空間そのものの解明に関わる重要な問題である。生産力や輸送力、生命力を潜在的に内包させた水辺は、都市の発展に欠くことのできない根源的な存在であり、都市空間の存在形態を強く規定してきた。成熟社会へ向かいつつある我が国において、既存の都市空間の在り方が問われているいま、経済成長に伴う過度な開発行為を前提とした枠組みから抜け出し、地域が育んだ場所の歴史や特性を丁寧に紡ぎ、再生に結び付けていくような柔らかな視線が求められている。都市と水辺との関わりは、その重要な糸口となるのではないか。こうした視点に立ち、水辺という場所から都市空間の成立や変容、発展過程を読み解いていくその足掛かりを得たい。

本論文では、江戸東京の水辺として、これまであまり注目されてこなかった外濠・神田川に焦点を当てている。特に、四ツ谷御門から牛込御門を経由して水道橋に至るまでの区間では、一部では水路も兼ねてはいるものの、基本的には江戸城を構成する城郭であり、その流域の広範な部分で実利的な活用はなされていない。そのため、都市空間の水辺として捉えられることはなく、空間構造や生成のメカニズムについての解明は試みられることはなかった。しかし、都市の要害としての側面が強かった近世期における外濠・神田川は、近代においてその意味と空間を転換し、それまで部分的であった湊機能の拡張や、河岸地・物揚場の新設、さらには鉄道用地や近代工場の生産地として、都市空間との有機的な結びつきを再構築するに至る。

その際、堀端であるという歴史性や風致の問題、水路として利用可能であるという実利的な側面、さらには内外を隔てる境界としての性質など、重層的な意味を帯びながら、近

代以降の都市空間に対して一定の影響力を発揮していく。こうした一連の過程のなかで、周辺市街地を見ていくと、そこに出現した近代施設や有力な商人、さらには地域開発を担う地主やデベロッパーの多くが、神田川に新設あるいは拡張された河岸地を活用する、近代の水辺利用者であったことは注目される。このような視点から、江戸東京の重要な水辺として外濠・神田川を位置づけ、都市空間の成立や変容、発展過程の解読に迫ることが、本論文全体の構想であり目的となる。

具体的な方法としては、土地の権利関係とその主体に焦点を当てていくことになるが、特に河岸地の成立と展開をめぐっては、河岸地の拝借人、地坪、用途、拝借期間などが記された「河岸地台帳」と呼ばれる東京府発行の公文書と、河岸地拝借に至るまでの前段階として東京府に提出される「河岸地拝借申請」を参照する。そのうえで、水辺空間を堀端や土手といった水際の場合と、それに隣接する町や施設といった周辺地域を含んだ一体的な空間として定義し、これを「管理される場」、「営為の場」という相互の関係性から捉え、揺れ動く空間の輪郭が築かれていく過程、あるいは崩れていく一連の動向から、都市空間の変容や発展過程を見出していく。さらに、水辺の都市的な意味が転換した近代以降期に焦点を当てることで、水辺空間の変容を鮮明に描き出すことを企図している。さらに、水辺空間の変容が、陸上の都市空間との相互関係の基で成立しているという見方も求められる。流域の多くを旧武家地が占める外濠・神田川においては、周辺地域が近世期を骨格としながらも、部分では大規模に地域構造を転換させており、水辺を改変する主体が陸上の都市空間に対して一定の影響力を発揮していたことが想定される。水辺の土地とその周囲の土地がどのように結びついているのか、その構成原理を探ることが求められるといえよう。

以上を踏まえたうえで、本論文は2章、3・4・5章、6・7章の、いわば3部からなる構成とし、それぞれに以下の視点から考察を行っている。

まず2章では、明治期の外濠・神田川が、明治政府によっていかに処理されたのか、その制度的な構成を確認する。もともと江戸城の城郭をなしていた外濠・神田川は、近世においては幕府による厳密な管理下に置かれていたものの、明治期にはこうした存立基盤を失うことで、都市の空白地として取り残されていく。こうした水際の特殊な場所が、明治政府による法的な網掛けによって管理されていく一方で、土手空間が持つ歴史や地形的特徴にも左右されながら、地区ごとに固有の変遷を辿ることになる。明治政府という新たな管理主体による意味づけと、現場での実態とを相互に観察しながら、近代の外濠・神田川としての存立基盤が確立されていく様子を明らかにする。

3・4・5章では、2章で解き明かした管理主体による近代における意味づけを前提としながら、外濠・神田川の土手を対象とし、そこにいかなる営為が作用し空間が生成されていたのかを見ていく。ここでは特に、水辺の開発主体の解明と、地勢的・歴史的な条件による空間の差異に留意しながら、いかに土手空間が読み替えられ、空間的な輪郭を帯びていくのかを論じる。具体的には、3章では神田川の外郭に立地した土手を、4章では対岸の

内郭側に立地した土手を対象とし、隣接町や周辺地域から土手利用が求められ開発されていく動向を、また 5 章では水辺の景観や風致といった側面に留意しながら、純然な堀である市ヶ谷濠・牛込濠の土手を対象に、特に甲武鉄道による鉄道敷設事業を通じて、鉄道会社、市区改正委員、陸軍といった異なる主体の意向が交錯するなかで空間的な輪郭が定まっていくなかを考察していく。

6 章では、外濠・神田川の周辺地域に目を向け、ここに至るまでに明らかにした近代における土手空間の改変が、こうした地区の空間変容と相互に関連する問題であったことを指摘していく。ここでは特に、水辺と周辺地域の空間構成を土地所有に焦点を当て分析する。近代の土手空間に出現した水辺の利用者が、周辺市街地の空間変容をも担う主体であったことを、市街地の土地所有と水辺の土地の借地構造から解明する。最後に、7 章では市ヶ谷濠・牛込濠の周辺地域に視点を移し、水辺の持つ風致や境界性といった歴史的特性や、地勢的な観点から、土地所有を前提とした都市組織の変容に水辺が与えた影響を見ていく。河岸地などを通じた直接的な結びつきとは異なる次元で、都市空間に対して作用する水辺の意味を解明し、6 章の成果と合わせて、水陸が一体となった空間利用を抽出し、近代における東京の空間変容のひとつの局面を描き出す。

これらの観点に基づく結果として、まず明治以降に様々なかたちでの営為を受容しながら、水辺が空間的な輪郭を再構築していく様子を明らかにした。最も特徴的なのは、神楽河岸、市兵衛河岸といった、外郭側に面した近代の河岸地成立である。変容する地域構造のなかで、隣接する町人地や武家地を切り開いた新開町、さらには陸軍砲兵工廠という巨大な官営工場によって地先の土手の意味が読み替えられ、相互の結びつきを構築しながら、川－河岸－町という一体的な空間利用を成し遂げた。対岸の飯田河岸では、近世期から連続的な土地利用がなされず、土堤によって囲まれる地勢的な条件から、地先というよりむしろ独立した個別の土地としての開発を招き、土堤内で完結する空間利用がおこなわれた。周辺地域に留まらず、対岸の河岸地も含めた広範な範囲から利用が求められることで発展した飯田河岸は、ひとつの磁極のように作用し、都市的なひろがりのなかで様々なかたちで営為を受けとめ、水辺空間の輪郭をかたちづくっていった。近代への転換期において見られる土手空間の変容は、こうした河岸地成立を通じての動向に限ったものではない。舟の乗り入れができない純然な堀である市ヶ谷濠・飯田濠を構成する土手においては、鉄道計画という近代事業に取り込まれたとき、多方面から空間的な要請を受ける都市的活動の場として変質し、それぞれの意向に左右されながら、近代における土手空間の輪郭を築いていった。

本論文はこうした一連の動向を、主にそこに関与した開発主体に焦点を当てることで解明を試みた点に独自性がある。河岸地を介して水陸の有機的な結びつきを築いた彼らのなかに、地域開発を担う地主やデベロッパーとしての一面も持ち合わせた人物が多いという事実を明らかにした。明治初期から神楽坂周辺の土地を集積し、地主層として地域開発の一端を担っていった神楽河岸の升本喜兵衛や野崎治兵衛、さらには飯田河岸の飯塚仁兵衛

の動向は、こうした性質をよく特徴づけている。また、下宮比町から神楽河岸を拝借した菊池栄造や、飯田河岸に移り住む以前に猿楽町を所在とした芹沢半蔵などのように、旧武家地跡に成立した新開町のなかで商業的な展開を見せた人物も注目される。近代の河岸地拝借人として影響力を発揮していく彼らの一連の動向は、明治以降の武家地再編に関わる動きが、水辺空間の変容と連関する問題であったことを示唆している。さらには、市ヶ谷濠・牛込濠周辺の土地所有の変容からは、水辺としての場の特性が、屋敷地の形成や神楽坂の発展など、地域全体の輪郭をかたちづくっていくうえでの重要な根拠となっていたことを解き明かした。外濠方向に開放的に構成された屋敷地や、神楽河岸を介した神楽坂の発展、さらには土手に築かれた近代建築による新たな風景の獲得にいたる動向から、外濠が地域の空間特性を規定する根源的な存在であったことを示すことができたのである。

こうして、本論文では近世から近代への転換期において、土手の都市的な意味が転換され、周辺地域も含めた一体的な水辺空間の輪郭が再構築されていく様子と、水辺をめぐる様々な動向から、地域の空間構成が変質していく過程を総合的に明らかにした。水辺という視点から、都市空間の生成と変容の仕組みの一端を示すことに成功したといえよう。

2. 審査結果の要旨

本論文は、都市構造が変容・変質していく過程において、水辺という場所がどのような意味を持つのか、その本質と影響、仕組みについて解明を試みたものである。これまで、水辺という枠組みで捉えられることがなかった外濠・神田川を対象に、河岸地の成立過程をはじめとした土手の改変の様子と、水辺利用者による周辺地域の土地取得や開発行為といった都市的な動向に着目した点にとりわけ新規性があり、水から見た新たな東京の都市論を描き出し、これまでになかった独創的な研究成果を挙げている。その主な成果は以下のとおりである。

1) 近世期までは江戸城の城郭である外濠・神田川の土手は、内と外、さらには隣接する地区によってその性質は異なる。明治期には、こうした歴史的な条件に左右されながら、様々なかたちで営為を受容し、空間が再構築されていく実態が以下の3地区での事例から明らかにしている。

(1)神楽河岸・市兵衛河岸

近世期の物揚場を拠点に土手の利用域を拡大し、隣接する町人地、新開町、近代産業地から地先の土手が求められ、川一河岸一町という結びつきを構築したことを解明した。

(2)飯田河岸

明治期に新設された本河岸地では、地先というよりむしろ独立した個別の土地としての開発を招き、一体的でひとつの町のような空間利用がなされ、倉庫や住宅、料理屋や芸妓屋といった様々な機能を受けとめつつ、近代の水辺空間をかたちづくっていったことを解き明かした。

(3)市ヶ谷濠・飯田濠の土手

明治期の鉄道計画に取り込まれ、甲武鉄道会社、市区改正委員、陸軍といった異なる主体の土手に対する意向のもとで、近代の空間的な基盤を築き、鉄道用地としては積極的に活用されながらも、濠の持つ防衛力や風致に対する配慮が求められ、近世と近代が融合した都市景観を生みだした。

2) 近代の河岸地拝借人が、水辺のみで完結しない地域変容の担い手でもあったことを明らかにした。都市空間を変容させる主体としての水辺利用者と、彼らの意向を受け止める水際、そしてそれらが複合的に動いていく水辺空間の様子から、明治期東京の新たな空間特性を指摘することに成功している。

3) 江戸城の城郭でありながら、近代においては地主やデベロッパーの意向を受け止める営為の場でもあるという両義的な意味を持ち、近世以来の舟運利用と近代のアクティビティが混在しながらも統合されるといった、近代の水辺空間に特有の展開を見いだしている。

4) 明治期の東京が、水運に依存しながら発展を遂げた点について、従来の研究ではその基盤を近世の水路網に求め、その強化・拡張という観点から近代の水辺が理解されがちであった。これに対して本論文では、個人による地先の物揚場のような江戸的なものから、鉄道や工場といった近代事業まで、連続性と新規性を同時に内包するという多面的な全体性の存在を明らかとし、下町と山ノ手という単純な二分法を越えた近代東京のひとつの側面を描き出すことに成功している。

以上の研究成果によって、本審査小委員会は全会一致をもって、提出論文が博士（工学）の学位に値するという結論に達した。

(報告様式Ⅲ)